

## 第二回西宮文学案内

### 「水木しげるの西宮時代」

日 時：2010年10月31日（日）

14時00分～15時30分

場 所：西宮市立教育会館

神戸松蔭女子学院大学教授 村上 知彦先生

夙川学院短期大学教授 河内 厚郎先生

○河内 それでは、始めさせていただきます。今回の西宮文学サロンを企画いたしました河内厚郎です。よろしくお願いします。

西宮文学サロンは、この西宮にゆかりのある人や物語、文学作品をどんどん取りあげていきたいと思って企画しました。今年は第一回目のシリーズですので、反響を心配していましたが、非常にたくさんの方に来ていただきました。特に今日はこのような雨のなかお越しいただいて喜んでます。できれば来年も春と秋の2回行いたいと思っておりますが、場所も市民会館の会議室ではなくて、市内には大学のキャンパスやレトロな建物など華のある建物がたくさんありますので、そういったところをいろいろと使ってやっていきたいと思っております。

まず第一回目は、「村上春樹と『阪神間』」と題して神戸女学院で開催しました。第二回目の今日は「水木しげるの西宮時代」ですが、あれだけテレビ、雑誌で水木しげるブームが起こっていても、西宮時代のことはほとんどふれられなくて非常に残念ですので、その話をしてみようということで、まず今日は講師として西宮に仕事場を持っていらっしゃるマンガ評論家の村上知彦先生にお越しいただきました。村上先生です。よろしくお願いします。

○村上 村上です。よろしくお願いします。

○河内 村上先生は手塚治虫文化賞の選考委員もなさっていますが、子どものころからず

つと西宮にお住まいですし、私もいま津門仁辺町に住んでいますので、地元の話がいろいろとできるのではないかとってお呼びいたしました。

では、早速村上先生にお願いしたいと思います。まず水木しげるが西宮に住んでいたことは昔からご存じでしたか。

○村上 はい、知っていました。今回も河内さんから、ある会議中に突然、知ってはりますかと振られて、ええ、知っていますと答えたら、それならやってくださいと気軽に頼まれてしまいました。実は、いまおっしゃったように、水木しげるの西宮時代はほとんど知られていません。というのは、あまり資料がないんですね。神戸で紙芝居を書き始めたけれども、その後、紙芝居が売れなくなったので、東京に行って貸本マンガを始めたということは知られていますが、その間、西宮に一時住んでいたというのはほとんど知られていません。

○河内 厳密にいうと、西宮には2回住んでいるんですね。戦前に甲子園に住んでいたようですし。

○村上 そうですね。あとでまた詳しくご案内しますが、関西には結構住んでおられます。大阪に住んでおられたこともありますし。

○河内 それでは、どのあたりから。

○村上 まずは自己紹介をもう一度したいと思います。いまご紹介いただいたように生まれは芦屋ですが、2歳ぐらいのときに西宮北口の県営住宅、いまの兵庫県立芸術文化センターの建っているところに引っ越してきました。それから30歳過ぎまでずっと30年以上西宮北口に住んでいました。実は、今津にはあまり行ったことがありません。昔、阪急と阪神が隣り合わせの駅でしたので、乗り換えはしょっちゅうしていましたが、今津で降りたという今津文化で映画を見たことや、川畑書店という本屋さんで本を買ったりしたぐらいで、実は、あまり今津の土地勘はありません。だから、むしろそのへんの話は、今日、聞きに来られている方のほうがいろいろご存じかなと思っています。

水木しげる作品は、小さいころから知っていましたが、ただ、貸本時代のマンガはあまり読んでいませんでした。ちらちらとは見ていましたが、貸本全盛のころは、僕はまだ小学校低学年ぐらいでしたから、ちょっと敷居が高かった感じでした。のちに『ガロ』とかマンガ雑誌に描かれるようになったころからはずっと読んでいました。

今日は『ゲゲゲの女房』で脚光を浴びて、文化功労賞を受賞されるという一大ブームのなかにある水木さんの西宮時代の話ということですが、まずは水木さんの略歴というか、西宮今津、あるいは関西とどう関わりがあったかということを確認したいと思います。お手元の資料に水木しげるミニ年譜というものを掲載させてもらいました。これは『ユリイカ』という思想文学の雑誌で、だいぶ前に水木しげる特集が組まれたときに載っていたものです。

水木しげるは1922年の大正11年、大阪で生まれました。出身は境港ということになっていますが、お父さんが当時大阪で働いておられたため、大阪のいまの住吉区東小浜、当時は西成郡小浜村で生まれて、生まれてすぐにお母さんと共に実家の境港に帰郷されています。ですから生まれたのは実は大阪だということです。そのあとの境港時代の話などは自伝等に詳しく書かれていますが、そのあたりまでふれますと絶対に時間がなくなりますので省略いたします。そのあと関西、阪神間と関わりを持たれるのが1937年、これは小学校を出てからです。境港の小学校を卒業されてから勤めに出ます。そのときに大阪の印刷所、石版印刷会社の図案職人にならんとして就職します。学校を出て勤め始めたのが大阪だったということです。

○河内 図案職人の見習いということは、やっぱり絵を描いたりするのが好きだったということでしょうか。

○村上 そうですね。子どものころから、子どもの絵とは思えないと言われて、いろいろ賞を取ったり、少年天才画家という新聞記事になったりしているぐらいですから、絵を描くのが好きな子どもだったことはたしかです。そういう特技を生かして勤めようとしたの

でしょう。大阪で勤めたというのも、お父さんが大阪で仕事をされたりしていて、いろいろつてがあったんだろうと思います。

ただ、ドラマやインタビュー等でご存じかもしれませんが、どうも働くことに向いていない方だったようで、仕事は転々とされています。しばらく大阪で勤めていましたが、1938年、体調を崩したということもあって、一旦、境港へ戻りました。その後、絵が好きだということで、そちらで身を立てさせようということだったんだと思いますが、絵の学校に入るために再び大阪に出てきました。

○河内 このころはどこに住んでいたんでしょうか。大阪市内だったんでしょうか。

○村上 このときの住居ははっきりしていないのですが、ここには親類宅に居候と描かれていますので、そういう感じだったんだと思います。

絵の学校といっても、専門学校ということです。画学校にもいろいろあったんでしょうが、入りやすいところに入ったという感じでしょう。進学のためにいろいろ勉強をし、資格を得るために学校を転々としました。その間、ずっと大阪に住んでいたようです。ちょっと話が飛びますが、保険会社に勤めていたお父さんがジャワの方に仕事に行かれていたのですが、1940年にそこから帰国されて、甲子園口に家を構えたということです。

○河内 西宮に住んでいたということが間違いなく分かるのはここからですね。

○村上 そうです。大阪に住んでいましたが、お父さんが帰国して甲子園に住んだので、そこで同居することになりました。このときに境港におられたお母さんと呼び寄せて、親子3人で甲子園で暮らし始めたということです。このときは無職だったそうですが、美術学校に行ったりしながら、1943年、日本大学附属大阪夜間中学に入学します。美術学校に行くために中卒の資格を取りたいということで、いろいろな学校に行ったのですが、どこも最後まで務まらなかったということです。1943年に召集令状が来て、鳥取連隊に入りました。1940年から1943年の春まで甲子園に住んでいたことが分かります。

軍隊時代の話は、いろいろ本が出ていたり、マンガに書かれたりしていますので省略い

たします。

○河内 ついでに言いますと、昭和 15 年から昭和 18 年に甲子園口に住んでいたとありますが、これは湯川秀樹さんが甲子園口に住んでいた時代とちょうど重なります。湯川さんは最初、苦楽園にお住まいでしたが、戦争前後から甲子園口に行かれましたので、だいたいその時代ですね。

○村上 甲子園口に住んでいたことは、数ページですが自伝マンガに出てきたり、エッセーなどにもちらっと出てきたりします。この話も細かいところはあとでできると思います。

戦争が終わって復員してくるんですが、1946 年 3 月によく駆逐艦雪風に乗って帰ってきました。私は少年時代戦記マニアで、この駆逐艦雪風が大好きなものですから、それを知ったときは何かうれしかった覚えがあります。復員してから東京に住んでおられました。片腕をなくされていますので、戦地でいい加減な手術をされていたのを、ちゃんと診てもらうために再度入院します。傷痍軍人の団体に仕事をして、それで食べていた時期もありました。そのかわり、武蔵野美術学校に通ったりもしていますが、ここもちゃんと出ていません。傷痍軍人の団体の仕事、(聴き取り不能)と言われていますが、それで西の方にやってこられて、その終点であった神戸でたまたまアパートが売りに出ているので買わないかという話を持ちかけられて、即買うことにしたと。このへんも面白いなと思いますが。それで東京を引き上げて、神戸で暮らし始めるわけです。

○河内 よく分からないのですが、それではお金はそこそこ持っておられたということでしょうか。

○村上 これは月賦で買っています。何百万円かするのですが、100 万円の借金が初めから付いているかわりに 20 万円で購入すると。その 20 万円を月賦で返したらいいということで、手元にあるお金でとりあえずは買えたということです。

○河内 かなりアバウトな感じですね。

○村上 そうですね。ですから東京にいても、特に展望がなかったということなんだと思

います。アパートであれば家賃収入が入ってくるので、それを支払に充てても余りで暮らせるのではないかという甘い考えを持たれたそうです。ちなみに、この神戸時代のことは、『ゲゲゲの女房』のブームのときに、水木しげるさんが神戸に住んでいたということにちなんで阪神電車がキャンペーンをやって、いろいろ紹介されたようです。

○河内 阪神電車がスタンプラリーをやっていましたね。

○村上 この時代に水木しげるというペンネームが決まります。それは買ったアパートが水木荘という名前で、神戸の水木通りというところにあったからなんです。そこで紙芝居の仕事を始めたということです。これはアパートの入居者のなかに紙芝居関係の方がいて、こんな仕事があるということで紹介されて描き始めたということです。それで、出入りしていた紙芝居の元締めで紙芝居の発注元のハシモトという人が、何度本名は武良だと言っても水木荘に住んでいる水木さんとは呼んでくれなくて、それで面倒くさいから紙芝居のペンネームを水木しげるにしたということです。

そのあと、神戸で紙芝居を描き始めたのですが、その紙芝居で描いた作品名が年表の 51 年、52 年のところにいくつか紹介されています。毎年、数作品描いたということです。紙芝居というのは、1 回 10 枚ぐらいのものを評判が良ければ 50 回、100 回と続けるわけですから、1 作品持っていれば 50 日ぐらい食えるということです。それで 7 作品ということですから、何回続いたのかしれませんが、毎日毎日描き続けて 2 年ほどで 7 作品ぐらいということです。

1953 年、昭和 28 年ですが、ここからようやく本格的な西宮時代になります。家賃を集めるのが大変だったようで、アパート経営がうまくいかなくなりました。この時代ですから、家賃を払ってくれない人もいっぱいいたんだと思います。そのへんの話も面白おかしくマンガに描かれたりしています。西宮に 2 階屋を買って引っ越します。これが今日のテーマになる今津の時代ということになります。そのときに、B 級戦犯ということで巣鴨プリズンに収監されていたお兄さんが出所してこられて、今津の家にお兄さん一家と同居する

ことになりました。ここでも紙芝居を描き続けています。それから翌 1954 年、これが『墓場の鬼太郎』が生まれた年です。

○河内 全部紙芝居だったわけですか。

○村上 はい、ここまでは全部紙芝居です。マンガはまだ描いていません。絵描き見習いからようやく仕事ができるようになったという時代です。年表の 1954 年のところにこうあります。鈴木勝丸一先ほど出てきました紙芝居の元締め、阪神画劇社の経営者ですが、彼から、こういう不況の時代は因果物があたらとアドバイスされ、教えられた伊藤正美原作の『ハカバ鬼太郎』という昔の因果物を元に、「のちの人気漫画『鬼太郎作品』の前身となる『蛇人』『空手鬼太郎』『ガロア』等を描く」と。このときはまだ『墓場の鬼太郎』というタイトルは使っていません。鬼太郎という昔の紙芝居のキャラクターを借りて、似たような話をつくった。だから、元の『ハカバ鬼太郎』そのままでもないんです。名前とイメージだけを借りて、勝手に話を考えていたという感じだと思います。

翌 1955 年、「のちのマンガの前身となる『河童の三平』を描く」。これも紙芝居として『河童の三平』を描いて、それをのちにマンガで書き直したものが代表作品の一つになっているということです。1956 年も紙芝居を書き続けて、1957 年に、「いよいよ紙芝居業界も衰退し、見切りをつけて貸本漫画に活路を見いだすべく単身上京」ということです。

○河内 これはテレビで出てきましたね。

○村上 ええ。その前の 1956 年のところに、テレビの普及が進み、紙芝居業界の低落傾向がはっきりとしたと書いてあります。テレビ放送が始まったのが 1953 年です。NHKがまず始めて、その数カ月後に日本テレビが始めて、それから 3 年、4 年ぐらいということですから、徐々に普及しだしたところということです。単身上京し、亀戸に下宿します。ですから 1953 年から、上京が 1957 年の何月だったかは正確に分かりませんが、それまでが西宮時代だったということになります。

○河内 単身ということですが、それまではずっと兄弟と一緒に住んでいたということだ

すね。

○村上 そうですね。お兄さんはそのまま残っていたんだろーと思います。

○河内 昭和 28 年から昭和 31 年に北口の両度町に宝塚映画の撮影所があったんですが、私はよくロケを見に行っただことを覚えています。それで、昭和 32 年に東京に行くということですね。

○村上 はい。そのあとは今回の話からは外れますが、これからは貸本マンガでなら、なんとかやっていけそうだといいことで。

○河内 昭和 30 年代は貸本はすごかったですね。

○村上 そうですね、ぎりぎりといったところですよ。60 年代に入るとまた貸本もだめになっていくのですが、50 年代の後半はちょうどよくなってきたところですよ。さいとう・たかをとかが大阪から東京に出ていったのも、ほぼ同じころでしょう。そのあとの苦労というのは、『ゲゲゲの女房』でかなり詳しく描かれています。上京した 1957 年から貸本マンガを描き始めて、1961 年に奥さんの布枝さんと見合い結婚をします。境港に戻って見合いをして、すぐ東京に連れて帰って、そこから『ゲゲゲの女房』の話が始まるわけですよ。資料には 1965 年まで載せていますが、1965 年の真ん中あたり、『別冊少年マガジン』に『テレビくん』を発表し、第 6 回講談社児童漫画賞を受賞。これを機に貧乏生活、貸本と決別し、多忙生活、雑誌へと移ります。ようやく順調に仕事が回り出したということですよ。

○河内 なるほど。

○村上 ですから、このあたりが『ゲゲゲの女房』になるわけですよ、今日、お話しするのはその直前までということになります。

○河内 甲子園口時代と今津時代があるわけですよ、今津時代が中心になりますね。そうしたら、そのころをどのようにたどっていかうかということになります。

○村上 まだマンガ家になっていないということ、皆さん、しっかりと頭に入れておいてください。



○河内 のちに描かれるマンガのヒントがこのころ出てきているということですね。

○村上 そういうことです。先ほど言いましたように、非常に資料が乏しいものですから、いろいろ推測で補いながらお話ししていくことになると思います。河内さんからどんどん質問等していただくと、こちらもお話ししやすいのですが。

○河内 今日はいろいろな仮説を出しますので、それを皆さんで言いふらしていただきたいと思います。言ったもんがちですから。西宮時代に水木しげるのキャラクターが生まれたという、できるだけ本当のことを紹介していきますが、広めていきたいと思います。

○村上 最初の画像を映してもらえますか。

○河内 これは今津ですか。

○村上 そうです。これはいま文庫本になっています『マンガ水木しげるの伝』という作品の「戦中編」から取ったものです。今津の商店街が下の方に出ています。

○河内 この商店街というのは、阪神の南側でしょうか。

○村上 そうですね。阪神今津駅の1本南の東西に延びている筋だと思います。資料3に、今津時代の水木しげるさんについて非常に詳しく調べて書かれている今津っ子さんという方のブログを引用していますが、そこで説明されています。ただし、この絵は、当時の記憶を元に書き起こしたというよりは、何か資料写真を手に入れて、それを元にやや修正を加えているようなので、どうも時代は昭和40年代ぐらいではないかと思います。

○河内 そうですか。今津という文字が見えますね。

○村上 はい。ただ、住まれていたあたりの風景であることはたしかです。上に「東京の加太太先生はそう言われる」と書いてありますが、これは加太こうじさんという東京の紙芝居作家で、プロデューサー的なことをされていて、紙芝居に関する著作もいろいろある方です。

○河内 わりと有名な方ですね。

○村上 『思想の科学』などに原稿を書かれたりしていました。この方がいろいろ東京と

のパイプ役のようなことをやっておられて、その左側が勝丸さんという、阪神画劇社の元締めで水木さんへの直接の発注主であります。

○河内 この人相の悪い人ですか。

○村上 そうです。人相が悪いというか、いかにも大阪人のような顔をした人ですが。こういうまちに住んでいたということを思い出で書いておられます。その話もあとでもう少し詳しくお話するつもりです。

この当時、紙芝居をやっていたということですが、残念ながら、水木さんの描いた紙芝居は残っていません。ご存じの方もおられるかと思いますが、紙芝居というのは原画をそのまま持ち歩いて、全国巡回します。原画が転々と次から次へと紙芝居師の手に渡っていくわけです。しっかりした貸し元だと、保存されていたりするのですが、倒産したりして散逸しているものがほとんどで、たしかに水木さんのものだといえるものというのはどうも残っていないようです。

○河内 そうですか。残念ですね。

○村上 この画像は手元に残っていた紙芝居の描き損じらしいです。神戸で「大 (oh!) 水木しげる展」が行われたときの図録に載っていたものからコピーしたものです。

○河内 ああ、この間の夏に行われましたね。

○村上 いいえ、この間の兵庫県立美術館ではなくて、2004年に大丸ミュージアムで開かれた、「大 (oh!) 水木しげる展」というものです。こういう、『ダイラ』というSF風の紙芝居の描き損じが載っています。次の画像をお願いします。

これは『小人横綱』というもので、年譜によると大ヒット作だったようです。回数が49、50、51と書いてあります。1日に1回やるわけです。

○河内 これは昔の朝潮の顔に見えるんですが。

○村上 何ともいえないですが。

○河内 これはパンダですね。

○村上 パンダですね。

○河内 パンダは、当時、まだ日本人にあまり馴染みはなかったですよ。

○村上 全然知られていないと思います。戦争で中国へ行かれたわけでもないのになぜかなど。これも謎です。解説にも、すでにキャラクターとして使っていたことになるという注釈が付いています。

○河内 やっぱり昔からわりと変わったのかも分かりませんね。

○村上 何なんでしょう。そういう、妖怪の一種のように見えたのかな。いずれにせよ紙芝居というのは、そういう 50 回、51 回と続くようなものだったということです。それを毎日毎日 1 回 10 枚ぐらいを見せて、さあ、続きはどうなるというところで次の日に続くということです。

次、お願いします。ここで『空手鬼太郎』が出てきます。先ほどちらっとタイトルだけ出てきましたが、現物は残っていませんので、これは再制作したものです。洋酒メーカーの広告のためと書かれていますが、要するに、当時の感じを復元してくださいと依頼されて描かれたものです。

○河内 これはもう完全にわれわれの知っている水木さんのマンガですね。

○村上 ええ。再制作した絵ですから水木マンガの画風になっていますね。

○河内 これは今津時代なんですか。

○村上 オリジナルの『空手鬼太郎』が描かれたのが今津時代です。鬼太郎物はいくつかあったと書かれていますが、先ほど言ったように水木しげるの原形となる『ハカバ鬼太郎』という紙芝居はすでに戦前にありました。

○河内 そうですか。

○村上 ただ、水木さんはそれを見て描かれたのではなくて、言葉でこういう話だということを知って、そこからキャラクターだけ借りたと。目玉おやじというのはおそらく水木さんのオリジナルだと思います。これは空手使いと鬼太郎が対決するという話のようです。

もちろんいまお見せしているのはCM用に簡単にしたものなので、元の話というのは、たぶんこの部分のごく一部にあって、延々と続いたのでしょう。

○河内 一応、水木しげるの鬼太郎というのは、今津時代に生まれたキャラクターと言ってもいいわけですね。

○村上 そうですね。水木しげるの鬼太郎に関しては、先ほどの年譜にあったように、今津時代に勝丸さんという元締めからそういうのをやってみないかと話を持ちかけられて、キャラクターを戦前のものから借りてきて、お話は水木さんが考え出したということです。

どうでしょうか、紙芝居の説明をもっとした方がいいですか。

○河内 どうでしょうね。私は紙芝居というのをよく覚えているんですが。

○村上 一応、いま、周りの壁に紙芝居の図版が展示してありますが、先ほども言いましたように、水木さんのものは残っていませんので、当時の紙芝居のものというのはこんなものであったという、ほかの方のものをいくつか展示しています。詳しい解説をしません、こういう絵柄だったり、内容だったりするものの一つを水木さんが手がけられていたということです。

○河内 もちろん水木さんは絵を描くだけですよ。

○村上 いいえ、お話も自分で考えられていました。

○河内 そうですか。

○村上 これもパターンがあって、すでにできあがったものに色を塗るだけという仕事、話があって、それに絵を付けるという仕事、それから話も絵も全部自分で考える仕事という3パターンあります。

○河内 水木さん自身が回って語っておられたわけですか。

○村上 いいえ、それは別です。いわゆる紙芝居屋さんというのは、水木さんのような作者が描いた絵を貸し元、勝丸さんの阪神画劇社などと契約して借りてきて、公園とかで演じて回る人です。演者はまた別ということです。

○河内 村上さんは、紙芝居を覚えておられますか。

○村上 覚えています。私は西宮に住んでいましたが、途中で2年だけ大阪阿倍野の母方の祖父母の家に預けられているんですね。母が西宮北口で美容院をやっていたんですが、美容学校に行くあいだ、おじいちゃんおばあちゃんに子どもの面倒を見てもらうということで。

○河内 村上さんもお父さんがユニークな方でしたから。

○村上 父親は絵描きなんです。

○河内 ちょっと水木しげるのような。

○村上 水木さんとはまた違うと思うんですが、現代美術というか、スタンダードと全然違う方向をやっていました。で、幼稚園から小学校1年のあいだ、57年から58年ごろに大阪の阿倍野におりまして、そこでは紙芝居が毎日のように回ってきていました。ただ、西宮北口に戻ってから見た記憶があまりないんです。阿倍野に行く前には、西宮北口で見た記憶がかすかにあります。

○河内 私も『黄金バット』を見たような記憶があるんですが、ちょっとろ覚えですが。

○村上 具体的にどんな作品かということはまったく覚えていなくて、飴を食べた記憶しかありません。型抜き抜きというのがあるんで、細い部分がつくってあって、なめていくうちに折れるんですね。折れないともう一個もらえるんですが、たいがい折れてしまっていて、次がもらえなかったという、そういう思い出しかないです。

話を戻すと、この時代の紙芝居作品というのが、実は、のちの水木マンガの原形になっているのです。いろいろあります。いま鬼太郎を見てもらっていますが、鬼太郎ものも紙芝居はマンガの鬼太郎とはかなり違うものだったと思います。先ほどの年譜の1954年のところに、鬼太郎作品の前身、『蛇人』『ガロア』などを描くとありますが、どういう作品かはまったく分かっていません。ただ、50回も100回も続くようなものであったし、なおかつ、当時の紙芝居のパターンのようなものも踏襲していました。因果ものが当たると言わ

れていましたが、ここで鬼太郎が出てくる。鬼太郎は、お母さんが亡くなって埋められた墓場のなかで母親のお腹の中から誕生します。その設定だけをおそらく借りているのだと思いますが、要するに、そういう親の因果が子に報いという、子どもがそういう宿命を背負って生まれて、ちょっと奇体な存在になってしまうということです。

○河内 いまはあまりそういうことは言えませんが、よくえべっさんで見世物がありましたね。

○村上 見世物小屋のものとか、そういうものの流れですね。

○河内 その墓場のイメージが、もしかしたら今津の＝ジョウガイ＝墓場という可能性はありませんか。

○村上 僕も今津の土地勘がなくて、言われてそうかなと思ったんですが、水木さん自身、お墓が好きだったことはたしかなようです。だから今津に住んだ、ということではないだろうとは思いますが。

○河内 当時、墓場を散歩するのが好きだったようですね。

○村上 はい、そうですね。鬼太郎は、作品としては紙芝居の元締めのお勧めで生まれたんですが、おそらく水木さん自身、わりと乗って描いていた作品だったんだろうなと思います。ただ、ヒット作ではなかったようです。エッセーとかで、鬼太郎はいくら描いても当たらなかったというふうに書いています。ヒット作というのは、先ほど見せた『小人横綱』というものが大ヒット作になったようです。

○河内 不況の時代に因果物が当たるといのは本当なんですか。

○村上 いや、これは僕はよく分かりません。ただ、何でしょうか、やっぱり不幸な話の方が共感を呼ぶということなんですかね。

○河内 なるほど。

○村上 では、ここからはのちのマンガ作品をお見せして、今津時代の紙芝居との関連を説明していこうかと思います。次、お願いできますか。

○河内 これもマンガですね。

○村上 貸本マンガを描き始めてからのものですが、これは『地獄の水』という作品です。近年に出た復刻版から取ったものです。これは水木しげるという名前ではなくて、東真一郎というペンネームで描かれた本です。貸本マンガのなかでもごく初期のものです。そのなかの一場面です。冒険、探検因果物といった感じです。お父さんが科学者ですね。

○河内 これも変わったマンガですね。

○村上 ええ。お父さんがこういう、怪物の姿になってしまうんです。そういう変身物が、結構、水木さんのものには多いんですが。地獄の水という、その水で体が変わって、最後には溶けてしまって、最後には溶けずに残っているのが目玉だけという。水木さんは、非常に目玉に執着があるようです。

次の画像を出してください。このあと、目玉がカップに入っていますが、このときに目玉おやじのパターンが出現しているということです。

○河内 これは幼年時代の記憶なのか、あるいは戦争に関係があるのでしょうか。戦争では、かなり激しい体験をなさっているわけですが。

○村上 目玉になぜ執着するのかということに対しては、70年代の終わりから80年代の初めにかけて出版された『別冊新評』という雑誌のなかに、加太こうじさんが語ったことを証言している人がいて、それが記事になっています。「紙芝居を始めて1953年、西宮にて加太こうじは、2カ月に1回ぐらいずつ水木の家には4日、5日泊まるあいだ、紙芝居について話し合った。あるとき彼の家に行ったとたんに、あいさつ抜きで彼は言った」。水木しげるが加太こうじに言った言葉です。「目がすな、目玉であります、それが神戸のまちを歩いていたら面白いですか。加太さんの来るまで、それを1週間ほど考え続けていたんです」と言っています。要するに、目玉を描き始めたのが神戸時代ぐらいからなんでしょうか。目玉のイメージのようなものは幼年時代から持っていたんでしょうね。幼年時代に描いた絵本のようなものとか、そういうのを見てみたら、たぶん元になるモチーフみた

いなものが出てきたりするかもしれませんね。

○河内 子どものころによくおばあさんに物語を読んで聞かせてもらったということがあったといいますね。

○村上 そうですね。のんのんばあという近所のおばあさんから聞いた話と、境港のお寺で見た地獄絵というものにもものすごく影響されたようです。

○河内 毎日新聞が、一度、「鬼太郎生誕の地」兵庫・西宮が街おこし」という記事を書いてくれたんですが、この記事を見ていますと、鬼太郎の登場人物、砂かけばあというのは西宮市周辺で伝わる妖怪だとありますが、本当でしょうか。

○村上 水木さんの妖怪というのは、子ども時代に聞いたものと、それからのちに資料で調べて描いたものとあるわけですが、それがもともとどこのものだったとか、そういうものはのちに調べて体系化されています。だから、自分で聞いた記憶と、それから過去からちゃんと伝わっているものをつなぎ合わせながら、水木さんが造形していったというものです。ですから、砂かけばあにしても、どこかでまずインプットされて、それがいろんな資料によって肉付けされていったわけでしょうから、西宮に伝わる妖怪だとしても、必ずしも今津におられたときに聞いたわけではないと思いますし、西宮だから特に特別扱いしたということもないと思います。つながりはあるとは思いますが。

次の絵を出してください。これは『怪獣ラバン』という怪獣物です。『ゴジラ』のような、話なんです。こちらにも復刻版が出ています。この表紙の絵は、もしかしたら別の方が描いているかもしれません。貸本マンガというのは、わりとそういうことが多くて、中身を描いているマンガ家と表紙の絵を描いている画家が別ということもあります。既得権益というか、食べる人の人数を増やそうということだと思っただけなんです。

○河内 そうですか。昔もワークシェアリングをやっていたんですね。

○村上 要するに、ベテランが若手の仕事の一部をピンハネしているときもありますし、いろいろなパターンがあると思います。このなかに、いわゆる変身のパターンが出てきま



す。

次、お願いします。この『怪獣ラバン』は探検に行った人が、仲間の探検家に陥れられて怪獣の姿になってしまうという話です。怪獣に変身してしまった一郎が、お母さんに一目会いたくて訪ねていくという、結構悲しい話です。これは先ほど年譜のなかに出てきた『巨人ゴジラ』という紙芝居が原形になってこの貸本マンガができています。ですから、『巨人ゴジラ』という紙芝居は、たぶんこんな話だったんだろうと思われま。要するに、人間が巨人怪獣になってしまうという話です。こちらの『怪獣ラバン』というのも、最初は水木さんは『巨人ラバン』としたかったのを、それでは迫力がないと、東宝で当たっている怪獣物のイメージが付いている方がいいということで怪獣というふうに変えられたとおっしゃっています。これは図版は用意していませんが、実は、『ゲゲゲの鬼太郎』で同じ話をまた、鬼太郎のものとして描き直したりしています。その意味でいうと、そののちの鬼太郎とか貸本マンガにつながるものが紙芝居時代に描いた作品から取られているものがここでもあるということです。

次、お願いします。これは、『怪奇猫娘』という作品です。先ほど貸本や紙芝居のタイトルで猫娘というのがでてきましたが。

○河内 これは墓場のシーンですね。

○村上 そうです。表紙を見ると、いかにも猫娘という感じですね。これにも墓場のシーンが出てきますが、墓場に埋められた母親から赤ん坊が生まれるという鬼太郎の誕生と同じパターンです。これは貸本版『墓場鬼太郎』を書く前に描かれた作品です。要するに、貸本版の『墓場鬼太郎』の誕生をイメージする作品が、すでにここで一度描かれて、それが繰り返されているということです。紙芝居時代の鬼太郎はこういう話ではなかったのではないかと思います。こういう作品を経て貸本の鬼太郎になり、『ゲゲゲの鬼太郎』になっていった。ですから、紙芝居の鬼太郎とマンガの鬼太郎をつなぐ作品といってもいいかもしれません。

次のページをお願いします。これは同じ作品ですが、その赤ん坊が成長して猫娘になったところですよ。お母さんが亡くなったというのは猫のたたりですが、娘にまで因果がめぐってしまいます。

○河内 ちょっとグロテスクなところがありますね。

○村上 魚を見ると猫のような姿になってしまいます。普段はすごい美人のお嬢さんがそうになってしまうわけです。また、先ほどの年譜のなかにも出てきましたように、『河童の三平』なんかは、そのままのストーリーで紙芝居時代に描いていたものを再度マンガで書き直しています。そういうパターンもあります。

○河内 なるほど。だいたいこれにつながりは分かっていただけだと思います。

○村上 何か河内さんの方から、これに関して何かありますでしょうか。

○河内 ちょっと私から見たらグロテスクのような気がするんですが。

○村上 紙芝居にしても貸本マンガにしてもグロテスクなものなんです。

○河内 そのころはそういうものが多かったんですか。もう少し若いですが楳図かずおさんなんかもある種、グロテスクなものを描かれますね。

○村上 そうですね。

○河内 ちょっと見世物小屋的な感じですね。

○村上 そうだと思います。

○河内 私なんかはネコが好きなものですから、こういうのを見るとギョッとしてしまいます。ただ、これを見ますと、昭和 30 年代というのは面白い時代だったなという感じがします。テレビが出回っていた時代だけれども。

○村上 テレビが出回り始めて、紙芝居なんかは、もちろんテレビに駆逐されてなくなっていった。紙芝居というのは、要するに、街頭、公園、神社とかに子どもを集めて見せるものなので、子どもがテレビを見に家に帰ってしまうと商売にならないわけです。その代わりに、貸本は家で読めるものですから、ある時期まではテレビと共存できていたという

ことです。グロテスクとか見世物的というものは、紙芝居時代がやっぱり大道芸なんです  
が、もともと仏教の説教みたいなものから始まっているようです。絵を見せながら説話を  
するという。いまお話している紙芝居というのは、1枚の板に絵を描いたものですが、そ  
のほかにも立絵という人形劇のようなものもあります。絵に割り箸を付けて動かして見せ  
るような、そういうものも紙芝居と呼ばれていました。

○河内 影絵のような感じですか。

○村上 影絵もまた、そのパターンの変形とっていいだろうと思います。この平絵の紙  
芝居というのは日本にしかないらしいです。

○河内 そうですか。

○村上 人形劇的なものは、おそらく世界中にあると思いますが、平絵の紙芝居というの  
はかなり特殊なものようです。

○河内 縁起物や絵巻物などで画像と文字の組み合わせというのは、日本は慣れています  
よね。

○村上 そうですね。マンガにしても、海外のマンガと日本のマンガとかなり違ったりす  
るのも、絵巻物などの物語の展開の仕方が関係していると思います。

<映像>

○河内 内田樹先生という神戸女学院の先生の説では、日本は文字そのものが象形文字の  
漢字とそれにルビや助詞を付ける、ふりがなを付ける、仮名であらわす。これが画像と発  
音する文字を組み合わせる文化が一番（聴き取り不能）という。

○村上 それは元々は養老孟司さんの説ですね。

○河内 ですから、日本はマンガが強いのは当然だということになってくるわけですね。

○村上 そういうものだったので、おどろおどろしさみたいなものも仏教的なところから  
来ている可能性もあると思いますし、あとはやっぱり怖い物見たさのような部分、見世物  
的な部分というのが大きかったらと思います。紙芝居にしても、貸本マンガにしても、

そういう意味では非常に親や先生からは嫌われるものでした。駄菓子を買って見るわけですから、不衛生だと言われたり、貸本マンガなんていうのはいろんな人の手を経ているから触るだけで汚いと。このへんの話は『ゲゲゲの女房』あたりで扱っていましたね。

○河内 これでは紙芝居から貸本マンガへと移るところが分かったかと思います。ちょっとこのへんで質問コーナーにしたいと思います。このあと今津の話に入りますが、その前にご質問がありましたら。マンガ評論家の村上先生に何かご質問はないでしょうか。

○会場 墓場の話が出ましたが、墓場というのは肝試しのようなことで行くことはあっても、あまり行きたい所ではないと思いますが、なぜ水木しげるは墓場が好きだったのでしょうか。

○村上 そうですね、これは本人に聞いてみないと分からないですが、『ゲゲゲの女房』のなかでも墓場を散歩しているというような描写がありましたね。子どものころからのんばあのお話を聞いて、妖怪というものを身近に、友だちのように感じていたところはあったようです。

○河内 妖怪の存在を本当に信じているのでしょうか。

○村上 信じているというよりも、見えているんだと思います。あると思って、感じているわけです。だから、信じるというのは、信じるか信じないかと言われて、信じる方を選ぶということですが、選択の余地なくそこにあると感じてしまっている。そういう意味でいうと、墓場という所が怖い所だという意識は、おそらくなかったんだろうと思います。ただ、それを作品に利用するとき、世間の不気味だと思っているイメージをうまく利用しているので、そのへんの見極めは付いていたんだなという気はします。

○河内 ときどき墓場が好きな人はいますよね。あれは何なんだろうと思いますが。

○村上 よろしいでしょうか。

○河内 ほかにございませんか。それではのちほどまた質問いただきます。

今津のまちなみですが、43号線、第二阪神国道は、あの時代にはまだなかったですね。

自分が小学校に入ったころにできた記憶があるので。

○村上 ええ。当然なかったと思います。

○河内 ということは、いまの土地の感じとはだいぶ違いますね。

○村上 そうですね。だから、もちろん高速もないですし、もう少し開けた感じだったと思います。今津の風景についても、ちょっと絵を出してもらいながら話をしましょうか。

○河内 その次の絵をお願いします。これはどこですか。

○村上 これも先ほどの神戸の「大（Oh!）水木しげる展」のときの図録から取ったものですが、水木さんが結構、この西宮時代にスケッチを残していっぱいます。

○河内 今津水波町。

○村上 「今津の廃屋」と書かれています。これはマンガのなかでも背景に使われたりしています。本人が散歩しているコースのなかにこういう風景があって、それをスケッチしていたという。どのへんなのでしょうか。かなり南の方ですかね、感じとしては。

○河内 誰かお分かりになりますか、どのへんかというのは。僕は結構、海に近いところのように思いますが。

○村上 商店街とか、まち中という感じではありませんね。ちょっと外れのような感じですね。

○河内 企業のグラウンドなんかのある、あの辺でしょう。

○村上 ええ。空き地なんかもそばにありそうな感じですね。こういう風景のなかを散歩しておられたということです。

○河内 スケッチをたくさん残しているということは、やっぱりもともと絵描きになりたかったということでしょうか。

○村上 先ほど言いましたように、この時代にも神戸の研究所に絵を習いに行っていますから、とりあえず紙芝居で食っているけれども、絵描きになろうという意味がこの時期まではあったということだと思います。

○河内 マンガ家という意識はなかったのでしょうか。

○村上 まだマンガの世界を知りませんから。

○河内 知らないんですね。

○村上 絵描きと紙芝居はわりとつながっていると思います。紙芝居描きのなかでも、実は、あまりいわゆる絵画の訓練はしていない感じの人もいらっしゃいますが、水木さんの場合は、わりと絵画に近い感じだったんじゃないかと思います。

○河内 わりと具象画ですからね。

○村上 次にいきましょうか。これがその背景に使われている場面です。先ほどの今津の廃屋がマンガの背景に使われています。これは自伝マンガのなかの一コマです。角川文庫から出版されている『私はゲゲゲ』という、先ほどのとは別の自伝マンガのなかから見つけたものです。これには「神秘家水木しげる」というサブタイトルがついています。

○河内 何かいつも絵に煙突が出てきますね。

○村上 そうですね。次、お願いします。

○河内 これはなかなか。

○村上 このスケッチは自分の部屋から見た外の風景ということです。要するに、2階屋を買って、下を人に貸したりしていますが、その2階で1日中紙芝居を描いていた。その窓から見える風景です。

○河内 結構、立て込んでいますね。

○村上 窓からガスタンクが見えています。南向きのはずですから、南向きの窓だと思います。駅前の商店街のところですから、当然、立て込んではいらるだろうと思いますが、このようにごちゃごちゃ2階屋があったり、平屋があったり、屋根の上に物干し台があったりする感じだったと。

○河内 「あきらめの境地だ」と書いてありますが。

○村上 ええ。やっぱり紙芝居というのは、毎日10枚か20枚描くわけですが、それでも

らえるのが 200 円ぐらいだと。売れっ子になると、10 巻で 1 千円ぐらいもらえたらしいですが。

○河内 （聴き取り不能）どのぐらいなんですかね。

○村上 2 千円、3 千円ちがいますか。

○河内 2 千円、3 千円ですか。それではちょっとしんどいですね。

○村上 こういう時代ですから、とにかく自転車操業というか、その日暮らしというか、それに近いような感じで、それも要するに、ヒット作、つまり人気があるからどんどん続けてくれと言われると続けますが、もう人気がないから打ち切ると言われると、次の話を一から考えなければならぬということです。そういう先の見えない状態ということです。

○河内 昭和 30 年前後ということになりますね。

○村上 次、お願いします。これも「画帳『西宮市今津』より」と書いていますから、今津で書いたスケッチだけのスケッチブックがまるまる残っているんだと思います。

○河内 これはどこでしょうか。

○村上 阪神武庫川駅の付近です。いまは川の上に駅がありますが、阪神の武庫川駅というのはもともとは尼崎側にありましたね。尼崎市側の雰囲気だと思います。

○河内 よく散歩をしていたということですね。

○村上 こちらは今津の商店街のスケッチということです。「路地の角から通りを眺めるような構図はマンガのコマを見ているようだ」とありますが、これは大丸ミュージアムの学芸員さんが書いた言葉だと思います。

○河内 これは駅前のところですか。

○村上 ちょっと僕はそのへん具体的には分からないのですが。家のある商店街のどこかの一角ということですね。

○河内 これなんかは、いまあっても変わらないようなまちなみですね。

○村上 ええ。やっぱり地べたで眺める感じと上から見下ろす感じがかなり違う感じはし

ますね。上から見下ろすといまと全然違うというか、時代性のようなものが逆に見えてくるけれども、地べただと、やっぱり人が行き来しておもてに見えているところなので、なんとなくイメージが連続しているんだと思います。昭和30年代だったらこんなものといったイメージがこちらにもありますし、裏側から見たり、違う角度から見たりすると、何かこんなだったのかという感じが逆に見えてくるのかもしれませんがね。下に日付が入っていますね。

○河内 30年とありますね。昭和30年の9月30日でしょうか。

○村上 朝7時、時間まで書いてあります。

○河内 今津時代は4年間ですから、ちょうどその真ん中あたりですね。朝7時から歩いていたんですね。

○村上 そうですね。歩いていたんでしょうね。商店街ですから、店がまだ開いていない時間ということでしょうか。

○会場1 その今津と書いてある店は、今津米穀さんですね。

○河内 今津米穀、米ですね。なるほど。お米屋さんですか。ほかにもご存じの方がいたら叫んでください。何でも分かるときに分かった方がいいので。

○村上 先ほど最初に見てもらった自伝マンガのなかの今津のまちを水木さん本人が歩いておられる一コマがありますが、あれと同じ所を別の角度から見ている感じでしょうか。

○会場1 そうですね。

○村上 そうですよ。ですから、同じ店が入っていますよね。では、次、お願いします。

○河内 今度はカラーですか。

○村上 そうですね。水彩で着色してあるんだと思いますが。

○河内 ガスなんかが見えますね。

○村上 窓の外のガスタンクというのは、大阪ガスのものですね。いまでもこれはあるんでしょうか。



- 河内 いまもありましたっけ。
- 会場1 ないです。
- 河内 もうなくなったんですね。
- 会場1 天然ガスなのですが。
- 村上 天然ガスですか。
- 会場1 いまはグラウンドになっています。
- 村上 なるほど。いつごろまでありましたか。
- 会場1 いつごろまであったかは分かりませんが、芦屋のところにもありましたが。数十年前と違いますか。
- 会場2 いま言われましたが、沿道のガスタンクはグラウンドではなく、今津中学の前の、いま大阪ガスの緊急の駐車場になっているところですね。
- 村上 駐車場になっているということですね。
- 会場2 ですから、ちょうど酒蔵通りの横にあったと思います。それから、僕は今津駅前商店街の者ですが、水木さんの住んでいた家からその方向でガスタンクが見えるかというのは、ちょっと疑問があるんです。
- 村上 なるほど。要するに、水木さんの家がどこかという話はまだしていないので、それを含めてのちほどまたそのへん確認したいと思います。要するに、今津中学のどちら側でしたっけ。
- 会場2 東ですね。
- 村上 東側のガスタンクだとすれば、商店街の。
- 会場2 今津西と酒蔵通りの交差点ありますね。その南側です。
- 村上 要するに、ガスタンクの位置はもっと右になるはずなんですか。
- 会場2 そうです。もっと右になる。
- 村上 もっと右になるはずということですね。なんか真南に近いところにあるように見

えているけれども、そんなはずはないということですね。なるほど。では、窓からのぞいたら見えるぐらいの感じだったということですね。

○河内 これは、あとから記憶を元に描いているわけですか。

○会場2 そのガスタンクをその位置で見ようと思ったら、津門川町になるかと思えますね。

○村上 では、その窓から身を乗り出せば右手に見えるぐらいの感じですか。

○会場2 そのころだと第3朝日という映画館があったころだと思いますので。まだ水木さんの家の場所は言っておられませんが、僕らが調べているところでは東歯科医院のあった、いまのトップワンのあった場所なんですね。そこから見た場合、その位置だと結構川の方に近いんですね。

○村上 ではせっかくですので、資料を見てもらいましょう。電気を明るくしてもらえますか。資料3に、今津っ子さんのブログに掲載されていた水木しげるさんの住んでいたであろうと思われる家の位置が出ています。地図も出ていますので見てください。

○河内 資料3の1、2ですね。

○村上 そうです。これは現在の地図でしょうか。今津駅があって、駅前の1本南の商店街のこのあたりが旧水木宅であったらと。その下が、何でしょうか、住宅地図、昭和何年でしたでしょうか。

○河内 昭和38年の住宅地図と書いてありますね。

○村上 はい。昭和38年のものということですが、だから少しのちですよ。それで見たところ東歯科というのが、のちに水木さんが売却して出ていったところだという記述があって、そこであるということがほぼ分かっているということです。その下に書かれているスイス堂時計などが先ほどの水木さんが描かれた絵に出てきていると思われれます。今津米穀店の今津というのが文字になっていたということですが、もう一度暗くしてもらえますか。今津と見えているのが今津米穀店の文字であろうという話です。

○河内 最初のものを出しましょうか。

○村上 では、最初のものをお願いします。ブログでは、絵を勝手に使うと著作権上、問題になるということで略図で上げられていますが、ここに今津米穀店の今津という文字だけが出ています。スイス堂の時計屋さんもしっかりと写っています。写真屋さんの看板を見ると、どうも時代はもう少しあとだろうということのようです。

○河内 なるほど。これは具体的ですね。だいたい分かりますね。★

○村上 水木さんの描かれる背景というのは、まちなみにしても、風景にしても、ものすごく緻密です。『ゲゲゲの女房』のなかでは、点々だけを延々と打たされていたアシスタントの青年の役を柄本明の息子（柄本佑）が演じていましたが、水木さんというのは背景に関して妥協しない人だというイメージがあります。なんでここまで詳しく描かなあかんねんというぐらい、ただの草むらをもものすごく丁寧に描いておられます。自然というものに対する見方が、やっぱり僕らとは違うような感じがありますが、それと同じように、まちも「まち」として見ていなくて、自然の一部のように見ているのかなというふうにも思ったりします。

○河内 次にいきましょうか。

○村上 ガスタンクの絵がもう一枚ありました。これは近くで描いたものです。

○河内 これは「大阪ガス供給所のものだと思われる」とありますが、これでよろしいでしょうか。皆さんはどう思われますか。

○村上 まあ、そうですね。要するに、あの位置からは見えるはずがないということ、先ほどの絵はガスタンクを近くで見たイメージと、部屋の中からの見た絵とを合成してしまっているかもしれないということですね。ガスタンクを描きたくて、見えないはずのガスタンクを見えるように描いてしまったということかもしれませんね。

○河内 そういうことはあるでしょうね。

○村上 ガスタンクがある方が、何か収まりがいいとか。

○河内 これは記憶を元に描いたのではなくて、当時、描いたものですね。

○村上 そうですね。当時、描いたものです。

○河内 それはこの通りなのでしょうね。今津時代にも絵を習い続けていたということですが。

○村上 神戸まで習いに行っていたということです。資料のなかに、水木しげる先生へのアンケートがあります。資料2の1、2の2です。これは、この講座をするにあたって水木しげる先生に西宮時代のことをうかがった結果です。これは僕が聞いたのではなく、財団の方がこんなものがあった方がいいだろうということで聞いてくださったようです。

○河内 どれもそっけない答えが多いですね。

○村上 先ほどもちょっと打ち合わせで話しましたが、いま一番忙しいときで、水木プロダクションとしては、おそらく本当はこんなことに構ってられないという時期だったかと思いますが。

○河内 だけれども答えてくれたということですね。

○村上 それでも答えてくれたということが重要ということで、あえて載せさせていただきました。ちゃんと答えてくれはったという、無視されなかったというか、それでも精一杯答えてくれたということです。水木さん自身が、もともとあまりそういうことにちゃんと答える人ではないんです。最初、インタビューを申し込んだら、忙しいのでアンケートにしてくださいといわれて、マネジャーの方が時間のあるときに聞いておきますというような感じだったらしいです。それで聞いた結果、こういう答えでしたということで、言った言葉をそのままか、言った言葉をさらに要約しているのか分かりませんが、そんなに詳しくは聞けなかったということだろうと思います。このなかに、Q5に、神戸市立美術研究所について、「今津から神戸市立美術研究所へ通ってデッサンを勉強されていました。神戸市立美術研究所には、小磯良平氏、小松益喜氏など蒼々たる方たちがおられましたか、水木先生が印象深く思われる先生はどなたでしたか」。

○河内 いないと。

○村上 印象深い先生はいないと。それだけです。思い出せなかったらいけないだろうということで、わざわざ名前を挙げたのだと思うのですが。図版、次、お願いします。

これが先ほども紹介しました『私はゲゲゲ』という自伝マンガのなかに出てくる当時の話です。神戸市立美術研究所というのは、阪神電車のキャンペーンのときに、見学、スタンプラリーコースに入っていました。いまは北野工房のまちとなっています。元北野小学校の建物をそのまま使っています。

○河内 校庭が観光バスの発着地になっていて、校舎の中にパン屋さんや紙すき工房などいろいろなものがありますね。あれは小学校だったんですか。

○村上 そうです。あれは北野小学校でした。当時は、北野小学校を借りて、夜間に神戸市立美術研究所というのを開いていた。小学校の校舎を借りて夜間だけやっていた学校です。そこに小磯良平氏らが教えに来ていました。マンガには北原小学校と名前を変えて描いています。

○河内 北野小学校ですね。

○村上 北野小学校で夜間だけ美術研究所が開かれていたということです。だから、看板も持ち運びできる看板が置いてあった。左下のコマで「きみはなかなか筋がいいね」というふうに言っていますが、次の絵をお願いします。そのように励ましてくれたのは、講師の小磯良平氏であると自分で描いているんです。それにもかかわらず、質問には「印象深い先生はおりません」と答えてしまうという、ここは水木さんらしい。そのときそのときで結構、おっしゃることがころころ変わったり、忘れておられるのか思い出すのもじゃまくさいのかわかりませんが、インタビューをそのまま受け取ると騙されたりします。べつに悪気があってというわけではなくて、そういうことにあまり関心がないというのが本音だろうと思います。

○河内 北野工房のまちは古い校舎を利用していたと思いますが、木造でしょうか。

○村上 どうでしょうか。そのへんはちょっと分かりませんが、昭和 30 年ごろ、ちょうど僕が小学生のころというのは木造から鉄筋に建て替わるころでしたから。

○河内 そうでしたか。

○村上 僕は小学校に 3 つ行っていますが、一つめのところは大阪市内で、ちょうど鉄筋の新校舎ができて格好良いなと思って見ていました。2 つ目は塚口の小学校で、そこは完全に木造でした。3 つ目は甲東園の甲東小学校でしたが、そこも一部木造校舎が残っていたかなど。

○河内 安井小学校なんかは長く木造でしたが。

○村上 時期的にはちょうど建て替えが進んでいた時期なので、順番で残っていたりするところがあると思います。

○河内 小磯良平に、きみはいいものを持っていると言われたと書いていますが、これは本当でしょうか。

○村上 これは分かりません。マンガですから、知っている画家の名前を出しておいた方がいいだろうということで、小磯良平が教えていたというのほうそではないから、そういう話にしたのかもしれませんが、『芸術新潮』が今年水木しげるの特集を組んだんですが、そこでも評論家の呉智英さんが水木さんがそういうことを言っていたということを書いています。ただ直接面識がなかったというのは嘘だと思います。実際に、直接指導を受けているはずですよ。それで、きみ頑張りたまえぐらいのことは、多分言われたでしょう。

○河内 時間があるときにもう一度インタビューしたら、また新ネタが出てくる可能性はありますね。

○村上 そうですね。ただ、ネタというの、こちらの聞き方に合わせて答えてしまうところがありますので。

○河内 答えを誘導するようにせつかく質問しているのにね。サービス精神がない人ですか。

○村上 いいえ、サービス精神はある人です。ただ気まぐれなものですから、サービス精神をどこで発揮するのかが読めない人だと思います。

○河内 なるほどね。

○村上 せっかくですので、アンケートに対する水木さんの他のお答えも見てみましょうか。

○河内 まず武庫川が印象的だったと答えておられますね。

○村上 スケッチにも武庫川駅がありましたから。ただ、記憶に残る風景や建築物はおありでしょうかという聞き方で、武庫川というふうに出てくるのは何だろうなとも思います。

○河内 例えば、いまモダニズム建築ブームで、そういうものを好きな人は甲子園ホテルを思い浮かべるんですが、水木さんはあまりそういうタイプではないということですね。

○村上 実は、甲子園ホテルも見つけるのが遅くて図版には使えませんでした。

○河内 あるんですか。

○村上 あります。やはり同じく『私はゲゲゲ』のなかですが、これは甲子園口時代です。

○河内 戦前ですね。

○村上 はい。戦前に住んでいたころなんです。

○河内 ちゃんとありますね。

○村上 ほとんど見えないと思いますが、甲子園ホテルを背景に使っています。ただ、これも甲子園ホテルについては何もふれていないんです。ただ背景として書いているだけです。

○河内 営業していた時代でしょうか。戦争中に閉めてしまうと思うんですが。

○村上 戦前ですからね。かろうじて営業していたのかな。ちょうどそういうのがどんどん難しくなっていく時代ですから、微妙なところだと思います。ただ、甲子園口の風景として記憶にはあって、絵はもちろん資料で描かれているんだと思いますが、そういうこと

にまったく関心がなかったわけでもないと思いますね。ただ、おっしゃるように、モダニズム建築である意味合いとか、それに対してものすごく興味を持つとかではなくて、ただ風景としてちゃんと記憶はしているという感じだと思います。

○河内 それから、宝塚歌劇について質問したということは、宝塚を見ておられたということですね。

○村上 宝塚歌劇についてはあちこちに記述があります。甲子園口から宝塚動物園と少女歌劇を見に行くのが楽しみだったとエッセーにも書かれていますので、宝塚歌劇の思い出のスター、作品の影響はありますかという質問があるのですが、手塚治虫のように詳しく覚えているわけではないと。

○河内 手塚治虫のここまで引用して、誘導していても。

○村上 きれいな女性が歌って踊る姿が面白かったという、何という答えだという感じですが。これも実はもう少し詳しく書かれたものがあります。水木さんの自伝としては、ちくま文庫に入っている『ねぼけ人生』というものが有名で、これは定本のようになっていますが、ほかにも何種類か子ども向けのものとかいろいろありまして。

○河内 これは全部村上先生の蔵書ですね。

○村上 そうです。

○河内 さすがです。

○村上 『ほんまにオレはアホやろか』という、いかにもいい加減に書いたというか、誰かが聞き書きして書き起こしたに違いないというようなタイトルですが、これは新潮文庫から出ているもので、以前にポプラ社から刊行されたものです。ポプラ社というのは、わりと児童文学系ですから、中学生向けといった感じの本です。この著書のなかで宝塚について非常に詳しく語っておられます。やはり甲子園口時代の話です。アルバイトで『支那通信』という業界紙を商社に配るという仕事をしていましたが、その休みの日に何をしていたかということです。「休日は、散歩と写生である」と書いています。何もないところを



楽しそうに歩いておられたんだなという気がします。「それと、宝塚」であると。休日の楽しみとして散歩と写生と宝塚というふうに3つ挙げています。「宝塚は当時から、関西の総合娯楽場で、動物園と少女歌劇を中心に、いろんな遊戯施設があった」。これは先ほどの質問の元ネタ、年譜を書かれた人がここから引用していたということですね。「ぼくは動物が好きだから、戦時下の休日を楽しむ家族づれに混じって、象や猿やオットセイや昆虫館を1日中オドロキの目でながめていた」。昆虫館で手塚治虫と会っていた可能性があります。「動物とおなじぐらいウレシイのが少女歌劇」。ウレシイと書いていますね。「歌舞伎は、女の役も男がやって、男だけの世界だが、宝塚は、男の役も女がやって、女だけの世界。しかも、観客も女ばかり。男のくせに宝塚を見るなんてのは、よほどの変人なのだが、ぼくはこれが大好きだった。華やかで美しく、軍国調の世間とはえらいちがいで、女だけの世界というものが存在しているのが異界のようでおもしろかった」。ですから、妖怪を見るように宝塚の女性を見ていたのでしょうか。異世界、別世界の話という楽しみ方だったんでしょう。

○河内 もちろんきれいなものとして見ているわけでしょう。

○村上 そうです。妖怪もきれいに見えているんです。「葦原邦子とか越路吹雪とか糸井しだれとか乙羽信子とか、みんなステキだった。宝塚は、千秋楽という最終日がすごい熱狂になる。舞台も観客もコープンして、絶叫がとびかい、それが女ばかりだからものすごい。ぼくはいつも一番前で見ていたから、おしよせる女の津波に押しつぶされかけたことが何度かある」。これは相当ですよ。

○河内 かなり通っていたわけですね。

○村上 かなりですよ、これは。

○河内 よく分からないんですが、配達したり、苦学しているように見えるけれども、この人はもともと貧しくはなかったわけですね。

○村上 家は境港の名家ですよ。お父さんはちょっと活発に。

○河内 転勤族でしたね。

○村上 保険会社の転勤だったと思いますが。

○河内 宝塚歌劇は、当時、入場料は安かったらしいけれども、しょっちゅう見に行っているし、画学校に行っているということは、経済的にはそれほど困っていなかったわけですね。

○村上 そうですね。だから戦前までというか、戦争に行くまでは、お父さんと一緒に甲子園口で住んでいたわけですから、自分自身はそんなに働き口がなくてアルバイト程度だったけれども、絵の学校には行かせてもらっていたということですね。

○河内 余談ですが、村上先生のお父さんは村上三郎さんという前衛アーティストですから、お父さんも水木さんのように風来坊的だったのですか。

○村上 風来坊ではなかったですが、勤めはできませんでした。父は具体美術協会という吉原製油の社長だった吉原治良さんが始めた、戦後の関西で始まった世界的に注目されていた前衛美術グループに所属していました。

○河内 そうですね。日本で最初の前衛美術でした。

○村上 村上隆にも影響を与えているらしいですが。

○河内 とにかく変わった人ばかりなんですよ。

○村上 変わった人がたくさんいて、いまもご健在の方もいっぱいいます。うちの親父は亡くなりましたが。

○河内 足で絵を描く白髪一雄さんのフットペインティングとか、それから頭に絵を描く人もいますよね。

○村上 嶋本昭三さんですね。

○河内 嶋本さんはまだご健在ですし。村上先生のお父さん、村上三郎さんはキャンパスのうしろから本人が飛び出してくるという。

○村上 そうですね。紙を破って通過するという。最初は神戸の廻船問屋か何かに勤めた

んですが、3日か1週間で辞めたと。それで、そのあとは河内さんの母校である甲陽学院で少しだけ教えていたようです。それは正規の教員ではなくて、美術だけ教えていたようです。そのような感じで、あまりまともな職に就いていませんでした。

○河内 時間がほとんどなくなりましたが、何かご質問はありますか。コニシさん、何かございませんか。

○コニシ 結構です。

○河内 このシリーズでいろいろな人を取りあげていきたいと思っています。今津だけに絞りましたが、宝津町に小松左京が長くお住まいでした。大学で『日本沈没』の小松左京の話をする時、みんなもう死んだ人だと思っているんですね。僕はこの前会ってきたというと、みんな、えーっと言うんですね。今津時代が長くありました。それから、演劇の世界では武智鉄二という方にも今津時代があったそうですので、調べていきたいと思っています。

それから、今津山中町に明石家さんまさんが下宿していたこともありました。さんまさんが笑福亭松之助さんの弟子になったときに、今津に自転車で通っていたようです。

いま何を思ったか、兵庫県の文化行政がやたら西宮を調べ始めているんですよ。それは今回、3番目のシリーズになります『涼宮ハルヒの憂鬱』というマンガ、アニメの舞台が西宮北高だからということもあります。北高にはトイレ借りに来る人や、見学者が急に増えたりしているそうです。県が非常にこうしたデータを集め始めているので、まだまだいろいろ出てくるのではないかと思います。皆さん、もしこれだということがあったら、ぜひ文化振興財団までご連絡いただきたいと思います。メールでも電話でも何でも構いませんので、情報をお知らせいただきたいと思います。ガセネタ、うその話は困りますが、ちょっと大げさにするのは構わないと思いますので、やや誇張はいいんじゃないかと私は思っていますが。よろしいですか。ほかにありましたら。はい、どうぞ。

○会場 水木先生に宝塚のことをお聞きしたのはいいと思いますが、水木先生は手塚治虫

さんのことはあまりいいイメージを持っていないと思うのですが、この2つのキーワードを一緒に聞くのはとてもタブーじゃないかと自伝などを読んでいて思ったのですが。これはわざわざ質問されたんですか。

○村上 質問は文化振興財団の方が考えられたものですが。ただ、宝塚のことはこのように本人も書かれていますし、手塚治虫についても、何でしょうか、ちらちらといろんなところで発言されていて、ただ、宝塚と手塚治虫というつながりは水木さんのなかではないと思います。手塚治虫はマンガでトップを張った人で、自分はそのときずっと不遇であった。ただ、手塚治虫文化賞という僕が選考委員をやっている賞を水木さんが受賞されたことがあるのですが、そのときのあいさつなんかは、非常にユーモラスに手塚さんも石森さんも仕事を一生懸命やった人は早くなくなるんですよ、はっはっはと笑っておられました。あまり働いてはいけませんと。でも、『ゲゲゲの女房』を見てもらったら分かるように、自分が一番働いているんですね。水木さんというのは、根を詰めて徹底的に働く人ですが、人生のある時点でそれを達観してしまったというか、働かないということを目指しながら働いてしまっている人なんだろうと。

○河内 そういう人はよくいますね。実際にそばで接してみて、水木さんというのはどんな感じの方ですか。

○村上 何度もお会いしているんですが、まったく覚えてくれません。呉智英さんという学生時代から水木さんの手伝いをやっている評論家の方がいるんですが。

○河内 愛知県に住んでいる方ですね。

○村上 そうです。

○河内 あの人と水木さんはどういう関係なんですか。

○村上 学生時代に水木さんに気に入られて、水木プロに出入りして鬼太郎のテレビの脚本の原案を書いたり、一時はブレーン的なこともされていました。

○河内 やっぱりおおらかな感じの人ですか、水木さんは。

○村上 そうですね。おおらかな感じの人で。

○河内 がつつした印象は受けないんですが、やっぱり仕事はがむしゃらにやっておられるのでしょうか。

○村上 ええ、がむしゃらに。本当に子どもみたいな人で、好きなことには熱中して周りが目に入らないぐらいですし、興味のないことはまったく頭に残らないという。

○河内 ということです。今日はこれで終わりたいと思います。ありがとうございました。

(終了)